

心が読める恋人に
「私なんかいない方が」と
考えただけでバレて、
笑顔のままだちゅどちゅ♡
絶対逃さないって
わからされてます
～爆モテハイスぺ弁護士の
重すぎるクリ責め溺愛～

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

序章 言わなくても、来ちゃう

三時を過ぎると、法律事務所の電話が少しだけ静かになる。事務員の私——白石真琴は、その隙に明日の打ち合わせの資料を揃えていた。

大きな会社に解雇された依頼人の裁判の資料だ。うちで一番大きい案件で、所長が自分で持っている。明日はその依頼人が来る。日付が、一日ずれている。

それだけなら私の見間違いで済んだ。でも添付の番号も一つ飛んでいて、相手方の会社名の字が、送付状と中身で違っている。たぶん、間違いだ。たぶん。

（これ、違う気がする。でも私が言っているのかな。先生が確認

してるだろうし……)

もう一度、頭から見直す。三度目。四度目。日付は一日ずれたまま、番号は一つ飛んだままだった。

(誰かに聞こうにも……)

先輩は来客の対応で席を外している。もう一人の事務の子は郵便を出しに行った。声をかける相手がいないのは、いつものことで、いるときも私は声をかけられない。前の会社で「なんで先に確認しないの」と言われた記憶と、「なんでいちいち聞くの」と言われた記憶が、気持ちを重ねる。

資料を揃えた姿勢のまま、固まってしまっていた。

「お疲れ様、白石さん」

上から、声が降ってきた。

「どうかした？」

顔を上げたら、所長の桐谷理人さんがもう私の机の横に立っていた。ネイビーのスーツに、襟の小さなバッジ。いつもの、ここにこした顔。

何も言えずにいる私の手元を、彼は自然な角度で覗き込んだ。

「ん？ ああ」

資料を一枚めくって、日付のところで指が止まる。

「これ、間違ってるね。訂正したほうがいい。だよな？」

頷くことだけは、できた。

彼は資料を持ったまま、電話を終えたばかりの、この案件の副担当の若手の先生の席へ歩いていった。二人の声は聞こえなかったけれど、先生が慌てて立ち上がって頭を下げるのは見えた。そ

れから、二人でこっちへ戻ってくる。

「すみません、助かりました。気づいてもらえてよかった」

先生は、理人さんに向かって言った。

「彼女が気づいてくれたんですよ」

理人さんが、隣でそう付け足す。彼が私に向き直る。

「そうだったんですね、ありがとうございます！」

（何も、言えてないのに……）

お礼を言われて、私は頭を下げ返した。頭を下げるのだけは得意だ。

（どうしてわかったんだろう）

先生が席へ戻ってから、理人さんは私の机に片手について、少しでも声を落とした。

「見てたらわかったよ、顔に出てるから」

「そう、ですか？」

何考えてるかわからない、と言われ続けて生きてきた。顔に出ている、と言われたのは、この人が初めてだ。

そして、この人は今回だけじゃない。いつもこうだ。いつも私が、言っているのかどうか迷ったそのときに、見計らったみたいに気づいて、助けてくれる。

（偶然、なんだよね？）

「もう大丈夫かな？」

「あ、はい……大丈夫です。ありがとうございました」

「よかった。何かあればまた言ってね」

それだけ言っ、彼は所長室のほうへ戻っていった。

事務の島の向こうで、先輩たちの視線が一度こっちに集まって、すぐに散る。所長がわざわざ事務員の席まで来て、資料を覗き込んで、助け舟を出す。それがどう見えるかは、私にもわかってゐる。

(……言わなくても、来ちゃう。彼は、きっと)

資料の日付を、赤で直した。



夕方、資料室で古い記録の整理をしていた。

背表紙の年度を揃えて、棚に戻す。誰とも話さなくていい仕事は、静かで、好きだ。

資料室は、入って右手に背の高い書架が並んでいて、一番奥の列は扉から見えない。

カチャリ、とドアが開く気配がした。

誰だか、分かってしまう。足音を聞く前に。

「真琴さん」

聞き慣れた、低くよく通る声。やっぱり、理人さんだった。

事務所で呼ばれるのとは違う言葉で、声の響きも違う。少しだけ低くて、少しだけゆっくりで、この呼び方ときは、いつもの彼じゃない。それも、もうわかっていた。

後ろから、包み込むように腕が回ってくる。硬い体。スツキリとした香水の匂い。ふるり、と身震いしてしまった。お腹が、熱い。

耳もとに、唇がぴとつと、くつつく感触。ぴくん、と肩が反応してしまう。

「かわいい」

（そんなこと、ないのに）

「かわいいよ？ 真琴さんは」

（また、考えてること、ばれてる……そんなに、顔に出てる？）
後ろから抱かれているのに。私の顔は、彼から見えないのに。

「ふふ、ねえ、今日もうち、来るよね？」

（今日も……？ また……）

でも、断れるはずはない。断りたいのかどうかも、よくわからないけれど。

「……はい」

「嬉しい。楽しみにしてる」

ちゅっ、と唇がうなじのあたりに落ちて、またびくつと跳ねてしまった。

それから、去っていく気配。ドアが静かに閉まる。背中に、彼の少し高い体温だけが残っている。そこからじわじわと、侵食されるみたいな感覚がする。

（今日も——されちゃうんだ）

棚に戻しかけた記録を、私はしばらく抱えたままでいた。



ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅっ♡ぐちゅう♡ぢゅっぢゅっぢゅっ

ぢゅっ♡♡

「ふああ、あああ……♡」

部屋に響く、粘着質な、恥ずかしい音。そして、もっと恥ずかしい私の喘ぎ声。

「ん、ぢゅ、かわいい、かあい……♡ ぢゅるううっ♡」

（や、そこで、しゃべらないでえ……♡）

「真琴さんが、ちゅう、かわいすぎるから、とまんない、しゃべるのも、舐めるのも……♡」

脚の間に、理人さんの顔がある。

次々に溢れてくる蜜を、おいしそうに、ぬるぬるの舌でねつとりと舐めとられていく。下から上へ、広い面でゆつくりと。れろ……♡れろん♡と舐め上げられて、腰の下が濡れてい

くのが自分でわかる。

理人さんは、そこを舐めるのが異様に好きだった。

初めての夜、経験のなかった私は泣きそうになりながら許しを請うたけれど、結局甘くささやかれて、隅々まで舐め尽くされて、数えるのも馬鹿らしくなるほどにイカされてしまった。それ以来、毎回のようにこうして舐められている。

（クリ、もう痛いくらい膨らんじゃってる……せつなくなってきた……♡）

舌は、わざとみたいに真ん中を避けている。周りばかりを柔らかくなぞられて、触れられていないところが、じんじんと熱を持つ。

「こっちのクリちゃんも、そろそろ寂しいね……♡」

……まただ。また、ばれてしまった。

おかしいと思う間もなく、ちゅぷう♡と生暖かい口の中に、ク
リが含まれてしまう。

「あ、やあ……♡」

「はむ♡ 待たせてごめんね、ちゅう、かわいいクリちゃん、
ちゅうう、ん、いーっぱいしゃぶって、可愛がってあげる♡」

（だから、そこでしゃべらないで♡）

唇に挟まれたまま、声が振動になって、直に響いてくる。

「ふふ、そうだ、気持ちよくすることに集中しないと」

（そういう意味じゃ……）

だんだんと、境界がわからなくなってくる。何を言って、何を
言っていないのか。私が口に出したのか、頭の中で思っただけな

のか。ただ、彼から与えられる怖いぐらいの気持ちよさに、翻弄されるしかなくなる。

ちろちろちろちろ♡

舌先が、先端だけを速く、小さく舐め始めた。

（あ、その一番きもちいところ♡ 舌先でペロペロされちゃってる♡ それ、弱いのにい……♡）

「ふふ、ここ？」

（あ、そこは、そこはホントにだめ……っ）

すると、ぴったりと、そこから離れなくなった。

ちゆくちゆくちゆくちゆく♡

集中的に、敏感なさきっぱだけを、舐め苛まれる。

（うそ、うそっ♡ きもちいところ、ずーっと離してもらえないっ

♡ きもちいとこぼっかり、舐められちゃってるう……ッ♡

「ここ？　ここがいいの？」

狙いを一度も外さずに、舌先で、こりゆこりゆこりゆこりゆ♡と一番気持ちいいところをほじくり続けられる。

（な、なんでわかつちやうのお……!?!）

「ひ、ああ……っ♡　らめっ、それ、らめれすっ♡」

「ふふ、んちゅ♡　ぢゅううう♡」

吸われながら、だめなところばかりを何度もなぶられて、血が集まるみたいな感覚がどんどん増していく。

腰が跳ねそうになる。でもできなかった。太ももごと、大きな手で押さえられていて、それすら許されない。

ちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷっ♡ぬりゅっぬりゅっぬりゅっぬ

りゅっ!!!♡♡♡

「あ、あ、イクッ♡ イクううッ♡ イッちやい、ましゅうう……っ♡♡♡」

返事のかわりに、舌の動きが増した。

細かく、露出した先端をチュクチュクチュクチュク♡といじめられて……とうとう、それが来た。

「おっ、おお♡ いぎゅっ!! い、きゅうう……っ♡♡♡」

イッた。イッたのに、離してもらえなかった。

宥めるように、ねろねろ♡とクリを可愛がられ続けて、もう一度、びくびくと甘くイカされてしまう。

「はあ……♡ かわいい……♡」

理人さんがそう言いながら、蜜で濡れた口元を、手の甲でぬぐ

う。そんな姿すら、色気たっぷりだった。

「もつとよく見せて？」

膝を持ち上げられて、カエルみたいに脚を畳まれる。膝がお腹につくくらいに折られて、全部が彼の目の前で開いてしまう。

（恥ずかしい……こんな格好、見せたくないのに……）

「この隠れてるところも、可愛がってあげる……♡」

ぬる……っ♡

器用に、舌で皮を押しつけられた。触れられてから、一拍おいて、びくつと来る。

（あ、直接う……♡ もつと、だめになる……っ♡）

ちろ……♡ちろ……♡

出てきたばかりの先端を、舌の先が優しく撫でる。じれったい

くらいの刺激がかえってつらい。

「はあ……っ♡ 真琴さん、入れていい？」

「は、い……っ♡」

彼が身体を起こして、部屋着の下を脱ぐ。ぶるんっ♡と音がしそうな勢いで、おっきなおちんちんが飛び出した。

理人さんは、知的なお仕事の割に、鍛え上げた体をしている。細身に見えるスーツの下に、しっかりした筋肉がある。身体の中から鎮座するそれは、何度見ても息を呑む。

ごくり、と喉が鳴った。

（また、これで泣かされちゃう……っ♡）

枕元の小さな箱から一つ取って、手早く着けた。何だかそれすら恥ずかしくて見ていられない。

ぬちゆうう♡

長い一突きで、大きくて太いものが、入ってくる。

「あー、真琴さんのなか、きもちっ……♡ さいつこう……♡」
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

「んあ、あーッ♡♡♡」

とちゅんっ♡

奥のところを、小さく叩かれた。

（あ、そこきもち……）

「ふふ、もっと気持ちよくなろうね……♡」

手を、恋人繋ぎにされた。指と指を絡めて、枕の横に縫い留めるみたい。狙いすぎましたように、私が気持ちいいと思ったその場所ばかりを、容赦なく連打される。

ごちゅっごちゅっごちゅっごちゅっ♡♡♡

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

「かわいい、かわいいっ♡ かわいすぎるっ♡」

フーツ♡フーツ♡

理人さんの息が、荒い。熱に浮かされたみたいな顔で、私だけを見ている。

（ちよっと、こわい……）

気持ち良すぎるし、理人さんの理性を失った感じも怖い。少し、止まってほしい。けれど、いつもはすぐ察してくれるのに、こんなときは、全然止まってくれない。

「あ！ あ、あっ♡ そこばっか、だめえっ♡」

「ここがきもちーとこでしょ？」

ばちゅっ!!♡♡♡ぐちゅんぐちゅん♡

「お、おとおお♡」

イッた、と思う間もなかった。締まったばかりの中を、休みなく押し広げられる。

(いま、イッたところなのに……♡ まだ、おく、ごちゅごちゅさ
れちゃってる……っ♡)

「ん、かわいい、かわいいっ♡」

唇が塞がれた。

「ひ、んぐ……♡」

声が、彼の口の中に消える。腰振りは、全く止まらない。繋いだ手が、拘束されているような気もしてくる。舌が入ってきて、私の舌を絡め取る。上も下も、理人さんでいっぱいだった。奥を

突かれて押し出される声は、全部、彼の喉に飲み込まれていく。

とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡

「ん、む……っ♡ んん……っ♡」

繋いだ手を、ぎゅっと握られた。握り返したつもりはないのに、私の指も、彼の手の甲に食い込んでいる。

唇が、少しだけ離れた。

「ふぁ……っ♡ あ、まって、いま……っ♡」

「うん、もうすぐだね。奥が、ちゅうって吸いついてくる……♡」

（奥、とんとんされながら、ちゅーされて……♡ 手も、口も、おなかの中も、全部理人さんに捕まっちゃってる……♡ きもちいいの、もう我慢できない……っ♡）

答えようとした口を、また塞がれた。

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅっ♡♡

腰の動きが、速くなる。ベッドが小さく軋んで、身体が枕のほうへずり上がっていく。ずり上がった分だけ、彼が追いかけてきた。繋いだ手は、一度もほどけない。

（また、くる……♡ イッちやう、またイッちやう……っ♡）

奥を叩かれながらのキスで、息の逃げ場がなくて、そのまま二度目が来た。締まったのが自分でわかって、彼が唇の隙間で笑う。

「はあ、だすっ……♡」

繋いだ手に体重がかかって、腰が、ぐっと奥で止まった。びゅくびゅく、と音が聞こえそうだった。

コンドーム越しに、吐き出される白濁。薄い膜の向こうで脈打っているのが、はっきりわかる。

一度では終わらなかった。びく、びく、と跳ねて、奥に小さな熱が足されていく。でもそれは膜の内側に溜まるだけで、私の中には一滴も届かない。理人さんは私の首筋に顔を埋めて、最後の一回が終わるまで、じっと動かなかった。

「はあっ♡ 結婚したら、毎日ナカ出すからね……っ♡」

「ひう……♡」

汗の引いた背中を、大きな手がゆっくり撫でている。

（結婚、理人さんと私が……？）

「ん？ こら、ぼく以外だれとするの？」

また、何も言っていないのに。

「えって顔してたよ？」

「そ、ですか？」

「うん、してた。顔に出てた。で、なんで迷ってるの？」

「えと、まだ、お付き合いして間もないですし」

「こんなに仲がいいんだから、全然問題ないよ。それに、ぼくは真琴さんしか考えられない」

「あ……」

こんな風に言ってくれるなんて。

（私、そんなに顔に出るんだろうか。前の会社では、何を考えるかわからないって、ずっと言われてたのに）

なんでだろう、と思う。なんで、私なんだろう。聞いたら、答えが本当になる気がして、聞けなかった。

天井を見ながら、こうなるまでの日々を、自然と思い出していた。

一章 思ったことは、言わない方がいい

うまく言葉にできずに、呆れられて、誤解されて。それが私の、ずっと前からの全部だ。

一番古い記憶は、七つか八つの頃の、夕方の台所だった。

弟が、ぐずって泣き続けていた。まだ二つか三つで、抱っこされていないと泣く時期だった。夕飯は途中で、コンロの火は一つだけついていて、母は弟を片腕で揺らしながらも片方の手で鍋をかき混ぜていた。座っていると、あの頃ほとんど見なかった気がする。

「もう、いい加減にして！」

母の強い声で、弟がもつと泣いた。

少し前に、公園で見たことがあった。同じくらいの下の子を連れたお母さんが、子どもがどれだけ泣いても、笑ってあやしていた。大人同士の話で「怒ってもしようがないからねえ」と言っていたのも、耳に残っていた。

だから私は、こう言った。

「ママ。あのね、公園の子のママ、下の子が泣いてもあんまり怒らないんだって。いつもにこにこしてた。ママも、そうすれば……楽になるかも」

母を責めたかったわけじゃない。怒鳴ったあとの母が苦しそうで、こうすればママもつらくなるかも、と思った。七つの私なりの、精一杯の解決、だった。

母の手が、止まった。

「……何それ」

弟の泣き声だけが、台所に響いていた。

「余計なこと言わないの。人の家のことなんて、真琴に何がわかるの？ 余計な口、出さないで！」

私は固まっていた。母の顔が、見たことのない顔だった。それ以上何か言ったら、もっと悪くなる気がして、何も言えなかった。

「……もういい。真琴は何も言わないで」

それきりだった。夕飯は、少し焦げたものが出てきて、私は黙って食べた。

今思えば、あのときの母はいっぱいいっぱいだったのだと思う。自分が子どもに怒鳴ってしまった、その直後に、娘から「よそのお母さんはにこにこしている」と言われたのだから。疲れて、後

ろめたくて、母だって後で言いすぎたと思っていたかもしれない。でも、当時の私にはわからなかった。私は助けたかった。その結果、怒られた。

自分が良いと思ったことでも、口に出すと、人を傷つける。だから、思ったことは、言わない方がいい。

それからの私は、何か思っても、一度飲み込む子になった。

「真琴、聞ってる？」

「またぼーっとして」

「この子、ほんと何考えてるのか分からない」

母にそう言われるたびに、飲み込んだものが喉の奥に溜まっていた。内心ではたくさん考えている。考えすぎているくらいだ。

でも、どれを出せば正解なのかがわからなくて、結局、何も口に出せなかった。

学校でも同じだった。会話の輪に入ろうとして、「これ言つて大丈夫かな」「変なことじゃないかな」と考えているうちに、話題は次へ進んでいる。二つ三つ遅れて口を開いても、もう誰も聞いていない。何度かそれを繰り返して、最初から参加しなくなった。

いじめられたことはない。嫌われてもいなかったと思う。ただ、「静かな子」「一人でも平気な子」として、視界に入らない存在だった。休み時間は、机で本を読むのが定位置になった。

孤独が好きだったわけじゃない。ただ、本が相手なら、何も言わなくていい。間違つたことを言つて、相手の顔色が変わる心配もない。だから一人でいるほうが、楽になった。

就職は、案の定大変だった。友達がいなかったぶん、勉強だけはと思って、成績はよかった。でも、まず面接が通らない。志望動機を聞かれて固まり、自己紹介で固まり、最後に何か質問はと聞かれて固まる。軒並みお祈りメールで、なんとか入れたところは、正直、あまり評判の良くない会社だった。

そこでもやつぱり、私は「何考えてるかわからない子」だった。黙っている和不機嫌だと思われ、よかれと思って動くと勝手だと言われる。指示がなくても気づいたことを直しておく、あとで「誰がやったの」と嫌な顔をされる。仕事そのものより、人の顔色を読むほうに力を使い切って、毎日疲弊していた。

そのうち、私がやっていないことを私がやったことにされて、

揉めた。説明すればよかったのだと思う。でも、説明しようとした口が、動かなかった。動かない私を見て、上司は「やっぱりね」と言った。そして結局、辞めることになってしまった。

それからしばらく、部屋で放心していた。カーテンを開けるのも億劫で、一日が終わるのを待つだけの日が続いた。

でも、働かなきゃ。貯金は、そんなに長くは持たない。何か言おうとして、言えなくて、また同じことを繰り返すのだろうか。そう思うと、求人ページを開く指が止まった。

二章 顔に出ていますよ

「事務員なら、資格は要らないらしいよ」

弟から連絡が来たのは、そんな頃だった。心配して、知り合いの伝手で聞いてきてくれたのだと言う。法律事務所で、事務の人を探している。姉さん、書類とか得意だったろ。受けるだけ受けてみたら。

法律なんて、わからないのに。そう思ったけれど、わざわざ繋げてくれた弟の顔を立てないわけにもいかなかった。どうせダメだろうと思いつつ、履歴書を書いた。

一応、できることはした。事務所のサイトを隅から隅まで読んで、実績のページをざっくり眺めて、志望動機を紙に書いて、鏡

の前で何度も練習した。鏡の前では、なんとか話せていた。

けれど面接では、やっぱりダメだった。手が震えて、心臓がばくばくして、いつも以上に話せない。

「白石さん。……白石さん？」

「は、はい！」

二度目で気づいて、椅子から半分浮いた。

「大丈夫ですよ、取って食いやしませんから」

和ませようとしてくれているのは、わかる。でも、それで落ち着けるなら、何十年も口下手をやっていないわけで……！

「それじゃあひとまず、志望動機は？」

「あ、はい、全然仕事がなくて、そこで弟に言われて……！ や

るだけやってみようと思ひまして！」

（少しでも社会の役に立ちたいと思ひ、法律に関わる御所を……）

「ぷっ、ははは。思つてることと言つてることが逆ですよ」

「え、え？」

私、いま、なにを……？ 反芻して、血の気が引いた。

（お、終わった……。よりにもよつて、志望動機を言い間違えるなんて）

鏡の前で何十回も言つた「社会の役に立ちたい」は、頭の中で言つただけで、口から出たのは弟のことだった。

「ふ、ふふ、失礼。まあ、いいじゃないですか。現実には働き口は必要ですし、皆そんな立派な理由で仕事を探してませんよ」

（優しい……フォローしてくれてるんだ……）

そこで初めて、相手の顔をまともに見た。すごく整った顔だった。若い。所長だと聞いていたのに、まだ三十を少し過ぎたくらいに見える。まぶしいくらいで見ていられなくなって、膝の上の自分の手に、視線を戻した。

「得意な作業はありますか」

「あ、ええと……得意というほどのことは……」

（会話がいらぬ事務作業全般は、得意、だと思ふけど……他の人と比べてすごいかつていうと、わからないし……私の勘違いかもしれない）

「うん、事務作業系が得意なんですネ。ならうちに適任だ」

（あれ？）

今、得意って、言つたつけ？

「で、でも……わたし、見ての通り、話すのが、苦手で……」

言った後で気づいた。面接で自己アピールどころか、欠点をアピールしている。これでは事故アピールだ。

「ははは、うまいですね」

「え？ え？」

頭に、大量のはてなが飛ぶ。私、何も言っていないはず、なのに。

「顔に出てますよ、全部ね」

「う、うそ……」

思わず、両手を顔にやった。

「……かわいい」

「へ……？ か、わ、いい？」

もう、完全に頭がオーバーヒートしていた。言っていないはずの

ことが伝わっている気がして、言われたことのないことを言われて。機械だったら、ぷしゅーと音が鳴っていたかもしれない。

「ふっ、よくわかりました。今日の面接は終わりです」

「あ……はい。ありがとうございます」

突然、現実に戻された気がした。こんな失敗ばかりして、受かっているはずがないんだから。とぼとぼと、ドアへ向かう。その背中に、さわやかな声がかかった。

「ではまた、会いましょうね、事務所で」

よく意味が呑み込めなかった。聞き返せばよかったのかもしれない。でも、そこで聞ける気力も勇気もなかった。そのまま、お辞儀をして部屋を出た。

どうやって帰ったかもわからないまま、狭いワンルームに帰り着いた。六畳に、本棚だけがやたらと多い部屋だ。ベッドとビーズクッションと、小さな机。窓の外で、夕方の電車が通る音がする。

ビーズクッションに、顔から倒れ込んだ。弟に、謝らなきゃ。せっかく紹介してくれたのに。なんでいつも、こうなんだろう。でも、もう少し後でいいかな……今は、氣力がない。

そのとき、鞆の中でスマホがびこん、と鳴った。無視しようかと思った。きっと、広告か何かだろう。

——でも、もし、何か大事な連絡だったら。急ぎの用事だったら。なんでこんなときにも変な気づかいをするのか、自分でも不思議だった。

なんとか起き上がって、鞆からスマホを引っ張り出す。メール、だった。通知の画面に、桐谷法律事務所の名前がある。さっき、面接したばかりの。

（もう、お祈りメールか。早いな……）

憂鬱だった。開きたくない。いっそ、開かずにアーカイブしてしまおうかと思った。けれど。やっぱり、見なくちゃ、だよね……。恐る恐る画面をタップして、ロックを解除して、メールを開いた。

目を、疑った。

白石真琴様——採用。

昼間の面接のやり取りを、頭から思い出す。あれで、採用？

（もしや……お情けだろうか。こんなにもどうしようもない私に、

同情して……？)

優しそうな人だったし、あり得る。だとしたら、申し訳なさず
ぎる、と思った。今、勢いのある事務所だと聞いた。きっと忙し
いのに、お情けで事務員を一人雇うなんて。

お断りするべきか、迷った。メールの下書きまで作った。けれ
ど……。

(お情けでも、せっかく、取ってくれたんだから、少しでも役に
立とう……)

そう。話すのは下手でも、それ以外のことだったら、少しは役
に立てるはずだ。下書きを消して、喜んでお受けします、と書い
て送信した。

それから、入所まで必死で勉強した。法律事務所の事務がどんな仕事なのか、本を何冊も読んだ。期日、記録、書面、書証、依頼人、相手方。知らない言葉を一つずつメモに書き出して、意味を覚えた。事務所のサイトも、もう一度最初から読み直した。

そこで改めて、彼の経歴を見た。面接の前に実績はざっくり調べていたけれど、これから働く場所だと思うと、身に入り方が違う。

彼の名前は、桐谷理人。二十四で弁護士になって、勤めていた事務所で数年のうちに名前が知られるようになって、二十八で独立した。紹介と口コミだけで依頼が集まりすぎて、三十で人を雇い始めた。今、三十二。若き凄腕弁護士で、負けなしの伝説を持つのだという。

そんな人が、私の面接を。あの日のやりとりを思い出す。思い出ただけで、顔から火が出そうだった。

本当に、どうして？



いよいよ迎えた、入所当日。朝礼のあとで、挨拶を促された。いろいろ考えてきたはずだった。スマホにメモを作って、前日に何度も練習して、通勤の電車の中でも、頭の中で練習していた。

でも、やっぱりダメだった。視線が自分に集まった途端、全部吹っ飛んで、動けなくなつた。前の会社でもそうだった。そのあとの、馬鹿にしたような笑いも。それを思い出した瞬間に怖く

なって、口が動かなくなつた。

（あ……なんだっけ？ 何を言おうとしてたんだっけ？）

隣に、人が立つ気配がした。

「初めての環境は、緊張してしまいますよね。まずは、面接を担当したばかりから紹介します」

あの、所長だった。

「前職で、請求まわりの事務と書類の管理を担当されていたそうです。うちでもよく行う対応なので、即戦力になってくれると思います。業界特有のことについては追々覚えてもらいますので、フォローをお願いします」

頷くメンバー。先輩らしい女の人が、にこっと笑ってくれた。

「ね？」

少しいたずらっぽい顔で、覗き込まれる。

「あ、はい！ よろしくお願いします……！」

かろうじて、それだけを絞り出した。拍手が、小さく起きた。席に着いてから、さっきのことを反芻する。みんなの前に立って、初めて、笑われなかった。それだけのことが、私にとっては一大事で、手がまだ少し震えていた。

無意識に、廊下の先の、ガラス扉の向こうを見ていた。目が合った。にこり、と笑う顔。その目の奥に、何か見えない熱がある気がしたけれど、気の所為だ、きつと。



桐谷法律事務所は、駅から少し歩いたビルの三階にある。

所長を入れて弁護士が五人、事務が私を入れて四人。決して大きくはないけれど、電話は朝から鳴りやまない。相談の予約は先の月まで埋まっていて、それでも「所長にお願いしたい」と言う人が後を絶たないのだと、先輩が教えてくれた。

入ってすぐが受付で、その奥に事務の島がある。私の席は島の端で、顔を上げると廊下の先の所長室のガラス扉が見える位置だった。先生たちの部屋は廊下の両側に並んでいて、一番奥が所長室。会議室は二つあって、午後はほとんど埋まっている。

私の仕事は、書類の体裁を整えることと、期日の管理と、郵便と、記録の整理だった。届いた書面に穴を開けて綴じ、ページを振り、裁判所の期日と提出の締め切りを期日簿に書き込む。先生

たちが書いた書面を、決まった形に揃えて、封をして出す。ときどき、裁判所へも行く。

電話と受付だけは、やっぱり苦手だった。名乗りの途中で声が細くなつて、相手に聞き返される。先輩がそれを見て、私の席の電話をなるべく取らないで済むように、席替えをしてくれた。

「その代わり綴じるのは全部お願いね」と笑つて。ありがたくて、胸がジンとした。

所長の一日は、朝、先生たちが順番に所長室へ相談を持っていくところから始まる。難しい案件は一度そこを通る。所長が「大丈夫ですよ」と言つたものは、本当に大丈夫になるのだと、先輩は言つた。午後は打ち合わせが続いて、夕方に書面のチェックが回ってくる。大きな案件と、最後の判断だけを手元に残して、あ

とは先生たちに任せている。

負けたことがない、というのが事務所の中の言い方だった。初めの相談で、依頼人が自分でも言えなかった本当の望みを先に言われて泣く。嘘の依頼は最初の十分で断られる。和解の落としどころを外したことがない。そういう話が、給湯室で当たり前のように交わされている。

そうしているうちに、気づいたことがある。彼は、ものすごくモテるのだ。思えば当然だ。若き敏腕弁護士で、所長で、そして、あの輝かんばかりの容姿。

彼と話す依頼人の女性は、もれなく着飾って現れて、帰り際には名残惜しそうに去っていく。所内でも、彼への書類の提出やコーヒー係の担当を取り合っては、小さく黄色い声がかかる。

それなのに、私のところに、度々来てくれる。私が言い出せないことを、絶妙なタイミングで察しては、さりげなくフォローしてくれる。体調がしんどい日に「今日はもう帰りな」と、先回りして言われる。

先輩たちの視線が痛いこともあった。でも、彼は気にした風もなく、相変わらずだった。



五月の連休が明けてすぐ、その人は来た。

初めての相談は所長が受けると決まっていたので、私はお茶とメモの係で会議室に入った。「所長の初回は依頼人が泣くから、箱

ティッシュを机の端に」と先輩から教わったのは、この日の朝だ。依頼人は、宮坂さん。三十半ばくらいの女の人だった。背が高くて、スーツの襟が真っ直ぐで、部屋に入ってきた瞬間に空気の向きが変わる感じがした。名刺の会社は、私でも知っている大きな会社だった。肩書きは、商品企画の部長。

「桐谷先生なら負けないって聞いて、来ました」
座る前に、それだけ言った。

「ありがとうございます。まずは、何があったのか、順番に伺えますか」

所長は、いつもの顔だった。彼女の話は、速かった。

三月の終わりに、会社を辞めさせられた。理由は、取引先から金品を受け取ったこと。会食のあとの手土産と、年末のお歳暮。

そのくらいのは部の誰もが受け取っていて、自分だけが問題にされる理由がわからない。本当の理由は、たぶん別にある。一月に、上の役員がやっていたことを、社内の通報窓口に知らせた。下請けの会社が無理な値下げを飲ませて、そのための数字を書き換えていた。通報した翌月に、急に「調査」が始まって、三月の終わりには懲戒解雇の紙が来た。

「解雇は無効だと、会社に言いたいんです。裁判で」

言い終わるまで、彼女は一度も言葉を探さなかった。私のメモが追いつかない。

（——すごいな、この人）

自分の正しいと思ったことを、ちゃんと言って、それが原因で解雇までされて。それでも戦おうと思えるなんて。自分にはない

強さで、それが眩しかった。

「わかりました」

所長は、手元の紙を一枚も見ないで言った。

「会社はたぶん、通報とは関係なく、調査は通報の前から始まっていた、と主張するでしょう。通報した人を、それを理由に辞めさせてはいけない決まりがありますから」

「……ええ。まさにそう言われました」

「そこが勝負です。調査が通報の後に開始したことを立証できれば、勝てます」

彼女の目が、少し潤んだ。それから、所長は私のほうを一度見た。

「この事件の事務担当は、こちらの彼女にお願いする予定です」

一瞬、自分のことだとわからなかった。私が、この裁判の担当を？　これまで裁判の仕事には少しずつ関わってきたけれど、一件を最初から最後まで担当するのは初めてだった。

（わたしで、大丈夫かな……）

自信がもてなくて、一瞬、固まってしまった。それを見とがめた宮坂さんが、眉を吊り上げて言った。

「先生、その、大丈夫なんですか？」

「ええ、もちろん。彼女ほどの適任はいません」

所長が私に向き直った。

「今回、取引関係の書類がかなり多いんです。白石さん、前の会で請求書や社内書類の管理をしてたでしょう？　こういうのは得意だと思って」

所長は、いつものように笑っていた。

「大丈夫。ここに来てからもしっかりやってくれてるし、白石さんのスキルなら十分対応できますよ。ね？」

胸の奥が、じんわり温かくなる。きっと、私に一通り経験させようとしてくれているのだと思う。この事件を最後までやりきれたら、事務員として必要な仕事はだいたい一人でこなせるようになる。

前の職場では、何も言えないのをいいことに、任されるのは誰でもできる雑用ばかりだった。ここでは、違う。ちゃんと見て、できることを見つけて、任せてくれる。

だったら、こんなときくらい。

（役に立ちたい）

「わかり、ました。その、やってみます」

私にとっては精一杯の答えだった。所長はにっこりと笑って頷く。けれど、宮坂さんはまだ、値踏みするような視線のままだった。

その週のうちに、私の机には彼女の会社の書類が積まれた。就業規則、解雇の通知、通報したときのメール、業績の評価表。一枚ずつ穴を開けて綴じて、番号を振って、目録を打つ。

誰にも頼まれていないけれど、書類の一覧を自分で作った。作った日付、作った人、どこの部署が出したか。並べておけば、あとで探するのが楽になる。前の会社なら「勝手に」と言われた類いのことだ。ここでは、まだ誰も何も言わない。それが、嬉し

かった。



ある日のことだ。その日は、訴状を出す前の晩だった。書証を揃えて番号を振って、目録の最後の一行を打つまでが私の仕事で、それが終わらないと、明日の朝に裁判所へ送れない。だから、残業になった。

一人、また一人と帰宅していく。閑散としていく事務所。電話が鳴らなくなると、こんなに静かな場所だったのかと思う。とうとう残ったのは、私と所長だけになった。

何故か、緊張する。別に、気にする必要なんてないはずなのに。

早く作業を進めよう。もうすぐ、だから。意識的に、目の前の書類に没頭した。綴じて、振って、目録を確かめて、あとは所長の確認用に送れば終わり。

送信のボタンを押した、その瞬間。

「終わった？」

「ひゃっ！」

いつの間にか、後ろに所長が立っていた。手が、私の机の上に置かれている。上質なスーツの腕が、私の脇にある。背中に、温度すら感じそうな距離だ。近い。

「あ、あの？」

「頑張ってたね、お疲れ様」

後ろから覗き込まれる角度は、昼間の事務所とは違って、妙に

どきどきする。

「あり、がとうございます……」

「このあと、空いてる？」

「へ？」

（空いてる？ 空いてるって、なんだっけ）

「ふふ、予定空いてるかってこと。もしよければ、このあと食事でもどう？ 遅くまで頑張って、おなか減ったでしょ」

言われてみれば……もう、こんな時間だ。いつもなら食べている時間で、気づいたら急に身体が空腹を訴えだした。

（で、でも、甘えちゃダメ……私なんか）

「そうくるか。じゃあ、ぼくに付き合ってくれない？ 一人で食べるのもさみしいから」

（じゃあ？）

まただ。私は、何も言っていない。頭が混乱してくる。

「ダメかな？」

甘えた顔で、覗き込まれた。整いすぎた顔が、目の前にある。それに押されて、とっさに答えていた。

「お、お願いします……！」

「ふふ、嬉しい。じゃあ行こうか」

（あれ？ どうしてこうなったんだっけ？）

その後は、普段行けないような高級なイタリアンに連れて行ってもらった。予想を超える値段に固まる私を、所長はにこにこと眺めて、「ぼくが決めていい？」と言って、私が気になると思って

いたものを頼んだ。また、あの不思議な感じで包み込んでくる。

不思議なことばかりなのに、何故か、不快じゃなかった。むしろ、どこか安心できる気すらしていた。

「ね。仕事の外では、真琴さんって呼んでもいい？」

メニューを閉じながら、所長が言った。

「え……」

「白石さん、だと、まだ事務所にいるみたいだから」

頷くと、所長は嬉しそうに目を細めて、続けた。

「ぼくのこと、理人って呼んでくれたら嬉しい」

「あ……それじゃあ、理人さん」

「さん、もいらないんだけど……でもいいか。それでも、嬉しいよ」

そう言って、くしゃつと笑った。事務所では見たことのない笑い方だった。

「無理、してない？」

食事が来るのを待ちながら、理人さんがふいに言った。

「全然です。前と比べたら……」

「それは基準がちよつと壊れてるよ」

すぐに返されて、言葉に詰まる。

「真琴さん、頑張り屋さんだし。だからこそ、無理はしないでね」

「あ、その……」

「うん」

急かさずに、続きを待ってくれている。その気配に背中を押されて、止まりかけた言葉が少しだけ前に進んだ。

「せっかく、もらえたチャンスなので。頑張ってみたくて」
（それに、楽しいと思ってる。この仕事を、理人さんとできることが）

そこまでは、言えなかった。けれど理人さんは、全部わかって
いるみたいな顔で目を細めた。

「嬉しいこと言ってくれるね」

「え？」

するり、と頬を撫でられた。あまりにも自然な動きで、反応で
きなかった。

近い。指先の感触を認識した途端、身体が固まる。

「ごめん。かわいくて、つい」

「か、かわいい？」

「うん。とーってもかわいかった」

何がどうかわいかったのか、まったくわからない。聞き返すこともできなくて、ただ熱の残った頬を、自分の指でそつとなぞった。

帰りは、理人さんが車で送ってくれた。紺色の、艶を抑えた高級そうな車だ。車種は知らないけれど、座席に座るだけで妙に緊張する。

結局、車の中ではほとんど話せなかった。理人さんも何も言わなかった。気まずいというより、さつき触れられた頬のことが頭から離れなくて、何を話せばいいのかわからなかった。

家の前に着いて、ドアを開けようとしたところだ。

「真琴さん」

「はい」

「また、こうして食事しない？ たまに」

「え？」

思わず振り返った。

（なんで？）

そんな私を見て、理人さんが笑う。

「真琴さんと、もっと話したい」

心臓が、変な音を立てた。

「でも、お忙しいんじゃない……」

「仕事する時間は決めてるからね。こうして食事するくらいなら、
いつだってできるよ」

そこで少しだけ首を傾げる。

「——真琴さんは、どう？」

私は、忙しいなんて言える生活をしていない。仕事が終われば家に帰るだけだし、人と会う予定だってほとんどない。

「大丈夫、です……」

出てきたのは、それだけだった。けれど理人さんは満足そうに笑った。

「よかった。じゃあ、また連絡するね」

車が見えなくなっただけから、しばらくその場に立っていた。頬が、まだ熱い気がする。無意識に、もう一度そこを撫でていた。

三章 用意してた

その日は、裁判所へ行った。私も経験の一環として、理人さんと宮坂さんに同行することになった。少し時間があって、待合の椅子に三人で並んで座る。

会話をしているのは、二人だった。私はいつも通り、隣で聞いているだけだ。

「こうなるかもしれないことは、少しは考えていました」

宮坂さんが、膝の上で手を組んだ。

「でも、許せなかったんです。あの不正のせいで、相手の会社は潰れかけていたんです」

「このままだと、そこで働いている人たちまで路頭に迷うかもし

れない。そう思っただんですね？」

「そう、なんです。だから、見て見ぬふりはできなかった」

迷いのない声だ。怖くなかったはずがない。それでも、この人はちゃんとやったんだ。誰かのために、おかしいことを、おかしいと。

（私は……）

何か思っても、黙っている。言っただ方がいいと思っても、自信がなくて飲み込む。そんな自分が、急に恥ずかしくなった。

やがて宮坂さんが「お手洗い、行ってきます」と席を立った。

私は、そのまま俯いていた。

膝の上で握っていた手に、ふいに何かが触れる。理人さんの手、だった。大きな手が、固く握っていた私の手を、そのまま包んで

いる。

「ぼくは好きだよ」

「え？」

思わず顔を上げる。理人さんは、いつもの穏やかな顔で私を見ていた。

「優しくて、いっぱい考えちゃって。それで、なかなか言えない真琴さんみたいな人もね」

「あ……」

どうして。そんなことを言われただけなのに。

ぽろ、と涙が一粒落ちた。

悲しいわけじゃない。嬉しいのかも、よくわからなかった。ただ、気づいたらこぼれていた。

理人さんの顔が近づいた。そう思った次の瞬間、その涙に唇が触れた。頬を伝いかけていた雫を、そのまま吸い取るみたいに。

「え？」

一瞬、何をされたのかわからなかった。

「え、え……？」

頭の中が、一気に真っ白になる。

（いま、いま何したの……？）

そのとき、宮坂さんが戻ってきた。理人さんは何事もなかったみたいにそっと手を離して、彼女の方へ向き直る。

「そろそろ行きましょうか」

（なんだったの、いまの……？）

横顔をじっと見てみると、ふいに理人さんがこちらを向いた。

目が合うと、にっこりと笑う。

その顔からは、やっぱり何を考えているのか、まったくわからなかった。



金曜日の夕方、相手方から書面と証拠の束が届いた。週明けの打ち合わせまでに、目録に載せて、こちらの一覧と突き合わせなければならぬ。先生たちは、もう出払っている。

「ぼくもやるよ。白石さんの一覧がないと、どれが新しいのかぼくにもわからないし」

そう言って、理人さんは隣に座った。所長にこんなことをさせ

て申し訳ない。けれど、彼は何故か、嬉しそうだった。

「白石さんの一覧、番号で引けるから助かるよ。ぼくも使わせてもらってる」

「あ、ありがとう、ございます……」

（気づいてもらえてたんだ……。やってて、よかった）

「うん、全部見てるよ、白石さんのことは」

理人さんはときどき、こうして不思議なことをいう。どう返していいかわからなくて、また黙ってしまった。

でも、理人さんは気にした風もなく、作業を続けてくれている。ふと時計を見ると、思っていたより遅い時間になっている。

「あ」

理人さんも同じように時計を見る。

「もうこんな時間か」

「すみません、私が遅くて……」

「違う違う。量が多いだけ。来たのも遅かったしね」

そう言うってから、机の上の資料に目を落とした。あと少し。たぶん、一時間もかからない。けれど今日に限って、ビルの点検日で、いつもより早い最終退館の時間が迫っていた。

「……これは、今日やっちゃいたいな」

理人さんが小さく呟く。

「私、持ち帰って確認します」

「それはだめ」

即答だった。

「事件の資料だし、白石さん一人に持たせたくない」

「あ……」

「それに」

少し考えるように首を傾げて、それからいつもの調子で笑った。

「ぼくの家、ここから近いんだ」

「え？」

「あと一時間くらいで終わるでしょ。そこで続きやっちゃおうか」
あまりにも自然に言われて、一瞬意味を理解するのが遅れた。

「い、家……」

「うん。嫌だったらもちろんやめるけど」

そう言われると、断る理由も見つからない。仕事だ。ただ、続きをするだけ。それに、週明けに持ち越して困るのも嫌だった。

「……大丈夫です」

「よかった」

理人さんは嬉しそうに笑って、机の資料をまとめ始めた。私はその横で鞆を閉じながら、急に心臓が速くなっていることに気づいた。

（仕事、だよね）

自分に言い聞かせる。仕事の続き。ただそれだけだ。

なのに、事務所を出て理人さんの後ろを歩く間、ずっと落ち着かなかった。

エントランスにはコンシェルジュさんがいて、エレベーターの階数が、私の住んでいるアパートの部屋番号より大きかった。玄関を上がると、窓の向こうに街の灯りが輝いていた。

通されたのは、書齋らしい部屋だった。壁一面の本棚に、難しそうな専門書がずらりと並んでいる。

理人さんが淹れてくれたお茶は、ふわりといい香りがした。それを飲んで少しだけ落ち着いてから、中央の広い机に資料を広げる。並んで座って、作業を再開した。

自分の仕事なのに、理人さんまでこんな時間まで巻き込んでしまっている。そう思うと、胸の奥がしくしくした。

けれど当の理人さんは、困っているどころか、むしろいつもより機嫌がよさそうだった。それが余計に申し訳なくて、また何も言えなくなる。

（早く。早く終わらせなきゃ）

ひたすら手を動かしていると、隣から声がした。

「いいよ、ゆっくりで」

「で、でも……こんな遅くまで」

「泊まっていけばいいよ。ここに」

手が止まった。

「と、泊まる!？」

「うん。明日、土曜日だし。何か予定あった？」

「ない、ですけど……!」

（男の人の家に泊まるなんて、初めてなのに）

そう思った途端、理人さんがなぜかうつとりしたように目を細めた。

「そっかあ。ならよかった。じゃあ問題ないね」

「え……?」

「大丈夫。ぼくも予定ないから」

（そういう問題……？）

理人さんは満足したみたいにな、そのまま作業へ戻ってしまった。頭の中は疑問だらけなのに、手だけは勝手に動く。そこは長年の事務経験のおかげなのか、資料はどんどん片づいていった。終わらせなきゃと思っていたはずなのに。

（……終わったら、どうなるんだろう）

さっきからそればかり気になって、今度は終わってほしくないような気さえしてくる。

そんなことを考えているうちに、作業はほどなく終わってしまった。理人さんが横で手伝ってくれたこともあって、確認するところがないくらい、きれいに。

そのあと出してもらった食事も、ほとんど味がわからなかった。見た目はすごくおいしそうなのに。理人さんはそんな私を、ずっと楽しそうに見ていた。

「お風呂、お先にどうぞ？」

食事が終わると、当然みたいに言われた。

「え？　そこまで甘えるわけには……」

「いいからいいから。はい、これ」

渡されたのは、部屋着だった。

「え？」

てっきり今日着てきた服を、そのまま明日も着るしかないと思っていた。

広げてみる。女性物だ。しかもサイズはSで、たぶん私にちょうどいい。ほとんど着られたことがないみたいだ、きれいだ。

（なんで、こんなものが……？）

一瞬、嫌な想像が浮かぶ。

（彼女さんの、とか……？）

「真琴さんのだよ？」

「は、はい？」

見計らったような発言に、顔を上げる。

「わ、私の……？」

「うん。用意してた」

にこにこと笑ったまま、理人さんが続ける。

「真琴さんに着てほしくて」

(……?)

何を言われたのか、理解するまでに時間がかかった。

用意してた。私に。いつ? どうして?

聞きたいことはいくらでもあるのに、頭がパンクしそうで一つも言葉にならない。

「はい。じゃあ、いつてらっしゃい」

「え、あ……」

そのまま背中を押されるようにして、脱衣所へ入れられた。扉が閉まって、やっと少しだけ我に返る。

(と、とにかく早く入ろう)

これ以上遅くなったら、さすがに申し訳ない。

浴室は驚くほど広かった。湯船まで使つていいと言われていた

けれど、そんな余裕はなくて、シャワーだけで済ませる。

部屋着に着替えて戻ると、理人さんが目を丸くした。

「もう出ちゃったの？」

「はい……」

「お風呂は？」

「あ、今日は、いいかなって……」

「ふうん？」

すぐ近くまで来たと思ったら、耳元で声がした。

「じゃあ今度、一緒に入ろうか？」

「ひゃ……っ！」

肩が跳ねた。理人さんが、くすりと笑う。それだけで何もなかったみたいにな、入れ替わりで脱衣所へ消えていった。

その背中を見送りながら、胸元を押さえる。さっきから、心臓が壊れそうなことばかり起きている。

それに。なぜだかわからないけれど。これだけでは済まないような気がしてならなかった。

その予感は、当たった。理人さんがお風呂から戻ってきたのは、それからしばらくしてだった。

「お待たせ」

顔を上げて、それだけで固まった。バスローブ姿だった。

いつもきっちり整えられている髪はまだ少し濡れていて、前髪が額に落ちている。首元から覗く肌も、スーツ姿のときとは全然違って見えた。

（な、なんでそんな格好で……）

どこを見ればいいのかわからなくなって、慌てて視線を落とす。そんな私を見て、理人さんがふっと笑った。

「真琴さん、かわいい……」

「え？」

「ぼくの家我真琴さんがいるなんて……はぁ♡」

本当に嬉しそうな顔で言われて、ますます意味がわからなくなる。理人さんはそのまま、私が座っていたソファの隣に腰を下ろした。

近い。さっきまで仕事をしていたときより、ずっと。

「理人さん、ちょっと、おかしいです……！」

思わず、言ってしまった。すると理人さんは一瞬目を丸くして、

それから楽しそうに笑った。

「おかしい、か」

「だって、さっきから……」

「うん、そうだね」

あっさりと、認められる。

「確におかしい。真琴さんというときはね……♡」

「な、なんで、こんなこと……!」

無意識に少しだけ横へ逃げた。でも、その分だけ理人さんも近づいてくる。

「ん？ ふふ、わからない？　ずーっとアピールしてたつもりだったんだけど」

また少し離れる。また、近づかれる。気づけばソファの端まで

追いやられていて、これ以上は下がれなかった。

理人さんの腕が、私の横の背もたれにつく。囲われた。間近に、整いすぎた顔がある。

「好きだから♡」

「……え」

頭の中が止まった。

（すき……？）

誰が。誰を。

「理人さんが……私を？」

「うん」

迷いなんて一つもないみたいに、すぐに返ってきた。

「初めて会ったときから、ずっとかわいいと思ってたよ？」

「ずつと……？」

「うん。こうして一緒にいるようになったら、もったかわいくなっちゃった」

頬に指先が触れる。

「もう離したくないくらい」

「で、でも……なんで、私……」

本当にわからなかった。理人さんなら、もったきれいで、もったちゃんとしていて、もっと話ができる人だっていくらでもいるはずなのに。たとえば、あの、依頼人の人とか。

そんなことを考えていたら、理人さんがまたうつとりしたように笑った。

「はあ……そんなちよつと鈍いところも含めて、ゼーんぶ、かわ

いい♡」

「……っ」

「食べちゃいたい。今すぐ♡」

「ひぁ……♡」

耳まで熱くなる。理人さんはそれを見て、ますます嬉しそうだった。

「だから、ね？」

（な、何が、ね、なの……？）

「ぼくと付き合おう？」

「……え」

「大事にする、世界で一番♡」

あまりのことに、頭がぐるぐるした。好きだと、言われた。付

き合おうと、言われた。でも、そんなことを今まで考えたことすらなかった。

いや。考えないようにしてただけなのかもしれない。

「わ、私……いま、すみません、よくわからなくて……!」

「うーん、そっか」

理人さんは怒りもしなかった。少し考えるように首を傾げて、それからこっと笑う。

「じゃあ、お試してもいいよ?」

「お試し……?」

「うん。付き合ってみて、それでぼくのこと、もっと好きになつて」

そこまでは、まだなんとか理解できた。けれど。

「そしたら結婚しよ？」

「け、結婚!？」

また急に話が飛んだ、気がする。思わず声が裏返る。

「うん♡」

至極当然のような顔。もしかして、私の方がおかしいんだろうか。

「それでいい？」

「え、あ……」

お試し。その言葉につられて、先に口が動いた。

「……はい」

反射みたいに、頷いていた。

一瞬、理人さんが黙った。それから、今までで一番嬉しそうに

笑った。

「よかった……♡」

その顔を見た瞬間、胸の奥がきゅつとなった。

「じゃあ、恋人になった記念に、一つ試していい？」

「え？」

また嫌な予感がした。

「こういうことも」

「……っ」

理人さんの顔が、さらに近づく。

「嫌？」

聞かれて、息が止まった。

嫌かと言われたら。怖い。緊張する。でも。

「い、嫌じゃ……」

最後まで言う前に、唇が重なった。ほんの一瞬だった。触れるだけの、やさしいキス。

離れた理人さんが、私の顔をじっと見つめる。

「……かわいい」

もう一度。今度は、少し長く。

頬に添えられた手が熱い。何度か唇が触れて、離れて、また触れる。頭の中が真っ白になっていく。

「理人、さん……」

名前を呼んだ途端、理人さんの目が変わった。

「……だめだ」

低い声だった。

「ずっと、こうしたかった……♡」

「ひゃ……っ」

肩を抱かれて、そのままソファへ沈む。背中がクッションに触れる。

見上げると、すぐ上に理人さんの顔があった。さっきまで笑っていたのに、今は熱に浮かされたみたいな目で、私だけを見ている。

「真琴さん……♡」

呼ばれただけで、心臓が跳ねた。キスのあいだに部屋着のボタンの外されて、肩から落とされて、気づいたら、私は下着姿になっていた。

下着姿を見下ろされるのは、初めてだった。思わず胸の前で腕を交差させたら、手首をそっと取られて、左右にほどかれた。力が入っていないのに、戻せない。

「もうピーンとしちゃってて、かわいい。下着の上からもわかるね♡」

言われて初めて、自分で気づいた。薄い布を、内側から小さく押し上げているものがある。まだ、触られてもいないのに。

っん♡

指先でつつかれて、ぴくんと身体を跳ねさせてしまう。それがまた恥ずかしい。

「ひん……♡」

大きな手が、下着ごと胸を包んだ。形を確かめるみたいに、ふ

に、ふに♡と下から持ち上げられて、先が布の裏に擦れる。

そのまま下着越しに、両手の指でくにくに♡と捏ねまわされた。

「あ、あ、あ♡ ふああ……♡」

右と左で、指の動きが違う。右はゆっくり円を描いて、左は摘んで小さく転がす。どっちに気を取られていいのかわからないうちに、胸の先からお腹の奥のほうへ、細い糸を引かれるみたいな感覚が降りていく。

（なんで、胸なのに……お腹が、きゅってなるの……）

「かわいい声、もっと聞かせて？」

「や、やだ、こんな声、はずかし……んあ……♡」

「何度だって聞きたい。どんな声でも♡」

するりと、手がブラジャーの中に割り込んできた。

布が一枚なくなっただけで、全然違った。理人さんの指の腹の熱が、直接くる。

くにゅっ♡

先っぽを摘ままれて、「んあぁっ♡」と高い声が出てしまった。

口をふさごうとしたのに、両方の手首を、片手でまとめて押さえられてしまう。頭の上、クッションの縁に。理人さんの手は、私の手首を二本いっぺんに握っても、まだ指が余っていた。

もう片方の手はブラジャーの中で蠢いて、房をもみ込みながら、先端をきゅっ、きゅっ♡と挟んでくる。強く挟まれたあとに、指の腹でそうつと撫でられる。痛いくらいのに、くすぐったいくらいの。その繰り返しで、先がどんどん硬くなっていくのが、自分でもわかった。

「それ、だめえ……♡」

「じゃあこっち？」

もう片方の乳房に移動して、また、先端が捕まる。そして今度は、頭のところを爪でソリソリ♡とひっかかれて、甘い痺れがビリビリと広がる。

さっきまで弄られていたほうは、放っておかれているのに、じんじんと熱いままだ。触られているほうと、触られていないほうが、一緒に疼く。

膝を擦り合わせてしまったのを、たぶん、見られた。

「それも、それもだめですう……♡」

「だめ、かあ……じゃあ、こっちはどうかな」

するりと、手がブラジャーから抜けていった。それに安堵した

のもつかの間、今度はするすると下のほうに降りていく。お腹を経由して、太腿へ、太腿から――足の間。

「そ、そこは……！ ひあ……っ♡」

くにっ♡と下着越しに押しつぶされた突起は、もう痛いくらいに盛り上がっている。

「ここ、触ったことは？」

「あ、えっと……！」

（ときどき、触っちゃうん、だけど……！ でも、そんなこと……！）

「ふふ、あるんだ？」

やっぱり、ばれてしまった。彼に隠し事は、できないのだ。何故か。

「あ、その、ごめんなさい！」

「謝らなくていいよ？ 普通のことだから。どんなふうに触ってたか、ぼくに教えて？」

「あ、そんな……」

「こう？」

布の上から、指の腹が、小さく円を描く。

「それとも、こう？」

真ん中を避けて、脇をなぞる。

「こうだね？」

一番気持ちいい場所をこりゅこりゅっ♡と潰された。

「あうう……っ♡」

当てられてしまった。私がいとも、一人でしていたやり方を。

「ナカは、触ったことある？」

「一回だけ……でも、怖くて、すぐやめました」

もうどうせばれるんだから、全部正直に言うしかない。そう
思って口にしたら、少しだけ、楽になった。

「そっかあ、怖いよね、ナカは。じゃあ、ゆーっくりするから
ね？」

「は、はい……」

下着が、脱がされた。割れ目を、ぬるぅ♡と指で撫でられて、
入り口のあたりを、ぬぷぬぷ♡とほぐされる。

「んっ……」

ぞわぞわした感覚が、下から昇ってくる。自分で触ったのとは、
全然ちがう。理人さんの指は、太さが違うし、どこにどう来るの

か、予想できない。

つぷり♡

指が、第一関節のぶんだけ、ナカに潜り込んできた。

「んあ、あ……♡」

ゆっくりと、ナカをにゅこにゅこ♡と探るように動く指。

「ふふ、どこかなー♡」

「どこっ、て……？」

「真琴さんが、気持ちよーくなれるとこ♡」

「ひっ……♡」

言葉と一緒に、指がくにつ♡と曲がって、お腹側の壁をトンツ♡と突き上げた。途端に、ぴりりと走る、知らない感覚。

（あ、そこ、なんかちがう……っ！）

「教えてくれてありがとう、いい子だね」

「な、なんにも、私……」

「ここ、きゅーって締めて教えてくれたよ？　ここ、もつとつて♡」

「そ、そんな……んあ、そこ、ぐりぐりだめですう……っ♡　あ

あ……ッ♡」

「ん？　なんで？」

ぐりゅっ、ぐりゅぐりゅぐりゅ♡

執拗に、同じ場所を指で押し上げられて、そのたびに気持ちよさがどんどん上がってくる。

「へん、へんだからあ……♡」

「ふふ、気持ちいいってことだね？　気持ちよくするためにし

てるんだから、いいんじゃない？」

指は、止まってくれない。その度、いやらしい音が響いて耳をふさぎたくなる。

「むしろ……もつと気持ちよくなってもらわないと、ね？」

「ひい……っ♡」

ぐちゅぐちゅっ♡トンッ♡トンッ♡トンッ♡トンッ♡

（あ、あ、あ♡　だめ、その動き♡　どんどんきもちいいの、き
ちやう♡♡）

「いいねえ、もーっとなろうね♡」

「やら、やらあ♡　そこばっかやああ♡　ん、んっ♡」

「ここばっかじゃ、さみしい？」

「ふえ？　ちが……」

「じゃあ、こっちも可愛がってあげるね。一緒に♡」

そう言って、もう片方の手が伸びてきて、長い指が、すっかり充血したクリを捕らえた。

「あ、うそ、うそ、どっちもはらめっ♡」

にゅこ、にゅこにゅこにゅこっ♡

蜜をまぶした指で、音を立てながら、クリを上下にしごかれる。そのたびに少しだけ皮がめくれて、先端がしゅっしゅっ♡、と擦れて、すごい速さで快感が積み上がっていく。

その間も、ナカの指は気持ちいい場所を狙って何度も何度も押し上げてきて、そっちは、じんじんとお腹に溜まるような刺激を送ってくる。

「ん、お……っ♡ や、ば、しよれ、やば……っ♡♡♡」

（おかしくなるくらい、気持ちよくなっちゃう……っ♡ 自分で
するのと、全然ちがうつ♡ 気持ちいいの、ずーっと止めてもら
えないっ♡ あ、すごい、すごい、きちゃう、すごいのかちや
うつ♡）

「お、おとおっ♡ イクッ、イクうう♡♡♡♡」

びくんびくん、と腰をみつともなくへこへこさせて、思いつき
り達してしまった。

それでも、指の動きが止まらなかった。ナカの指が少し動きを
変えて、ぐり……ぐり……♡とゆっくりながらも同じところを捏
ね回して、クリも、押しつぶすみたいに、ぬりゅ……♡ぬ
りゅ……♡と撫で続けられる。

「あ、あ、もう、イッた、イッたからあ……♡ も、とめてくだ

しゃい……♡」

「うん、すーっごく、かわいかったよ……♡ だから、もっとみたい♡」

「あ、そんなにや……♡」

ぐりっぐりっぐりっぐりっ♡ぬりぬりぬりぬりっ♡♡♡

「あ、あ、あぁッ♡ なんか、なんかでちゃうっ♡ とめて、とめてえ♡」

お腹の内側から、押し上げられている。おしっこが出そうな、怖い感じ。きゅっとお腹に力を入れても、指は構わず押し返してくる。

「出していいよー。ほら、出しちゃいなって。ここでしょ?」
ぐっぐっぐっぐっ♡

立てた指で、一番気持ちいいところを容赦なくいじめられて、クリも、先端のめくれたところを集中的に、カリカリ♡つとされて……もう、我慢できなかった。

「あ、でる、でりゅううっ♡」

こらえきれない感覚が来て、ぷしゅっ♡と、音がした。

「あ……っ！」

気づいたら、股の間に身をかかめていた理人さんの顔に、何かがかかっていた。

（まさか……！）

「ご、ごめんなさい、私、なんてこと……っ！」

「はあ……♡ お潮、でちゃったね。かわいい♡」

怒るところか、うっとりした顔の理人さん。ぺろり、と口の端

についたそれを舐める様子が、すさまじく色気があって、くらくらしそうだった。

「汚いです、ティッシュで……！」

「汚い？ 真琴さんのが？ ふふ、そんなわけないじゃん。全部飲み干したいくらいだよ」

とんでもない発言に、頭が真っ白になる。意味を、受け付けられない。

「こっちも、飲ませて？」

予告編

体験版の本編は、ここまでです。

ここから先は、完全版の中から。
続きは本編でどうぞ。

四章 誰のこと考えてる？ より

その日の午後、受付のチャイムが鳴った。先輩は電話中で、私が出るしかなかった。

「お世話になっております。登記の書類をお持ちしました」

コートを腕に掛けた、少し猫背の男の人だった。封筒を受け取ろうとして顔を上げて、私は、それを落としそうになった。

向こうも、動きを止めた。知ってる顔——幼馴染の森川だった。

「……真琴ちゃん？」

昔の声で、呼ばれた。返事ができない。ただ、その顔を見たまま固まっていた。

小学校から中学まで、隣の家だった。家の前で待ち合わせて学

校へ行って、帰りも一緒に、私が何も喋らなくても平気な顔をしている子だった。中二の春、彼の家が引っ越すことになって、その前の日の夕方、家の前で「真琴ちゃん、あのさ」と言いかけた。私は何も言えなかった。彼も、その先を言わなかった。それきりだ。

今は司法書士をしていると言う。うちの事務所が登記をお願いしている司法書士事務所について、今月から、こちらの担当になったのだと。

「まさか、真琴ちゃんがここにいるなんて」

「……うん」

「元気だった？」

「うん。元気」

それだけで、もう言葉が続かない。彼は昔と同じように、困ったように少し笑った。

「全然変わってないな」

何か返さなきやと思ったのに、やっぱり何も出てこなかった。

「法律事務所で、働いてるの？ ……真琴ちゃんか？」

驚かれるのは、わかる。教室で当てられるだけで固まっていたのを、この人は知っている。

「うまく、やれてる？」

「……うん」

「そっか。……もし、きつかったらさ。うちの事務所も、事務の人を探してるから」

廊下の先で、ガラス扉が開いた。理人さんが出てきて、彼に、

初めて会う人にする完璧な挨拶をした。名刺を交わして、担当が替わった挨拶を受けて、笑顔で。

目だけが、彼と私の間を、一度往復した。

「白石さんは、十分すぎるくらいやってくれていますよ。うちには、いないと困る人なので。ね？」

最後の「ね？」は、私に向けてだった。

所長室の扉は、閉まっていたはずだ。聞こえるわけが、ないのに。

「所長、お電話です」と先輩の声がして、理人さんが一度そちらを向く。その隙に、彼が声を落とした。

「このあと……少しだけ、話せない？」

息が詰まった。何を話すのだろう。あの日のことだろうか。そ

れとも、ただ久しぶりだから。

返事をしなくちゃと思うのに、口が動かなかった。

彼は少しだけ待った。でも、私が何も言えないままでは、それ以上は聞かなかった。

（もし、あのとき言えていたら）

ふいに、そんなことを思った。あの日、ちゃんと返事ができていたら。何か違っていたのだろうか。

呼ばれた理人さんが、去り際に声をかけてきた。

「白石さん。お預かりしている書類、資料室から出してきてもらえる？」

いつもの声、だった。

「はい」

資料室へ向かう。廊下の角を曲がる前に、なんとなく気になつて振り返った。理人さんが、こちらを見ていた。

いつもの笑顔だった。なのに、なぜか目を逸らしたくなった。



資料室の奥で、預かっていた書類の綴りを机に積み上げる。必要なものを一つずつ確認して、渡す順に並べていった。手を動かしていれば、余計なことを考えなくて済む。

（早く終わらせよう）

ページをめくる音だけが、小さな部屋に響く。そのとき、背後で扉が閉まった。

「真琴さん」

びく、と肩が揺れた。

仕事中とは違う呼び方。事務所で聞く所長の声じゃない。二人きりのときの、理人さんの声だった。

なぜか、振り向けない。

「……はい」

「さっき、何考えてたの？」

指が止まった。

「な、なんでも……」

「ふうん？」

後ろから、コツコツと革靴の音がして、ゆっくり近づいてくる気配がする。

「隠すんだ？」

「な、なんのことですか？」

自分でも驚くくらい、声が上ずった。背中 of のすぐ後ろで、理人さんが小さく笑った。

「そっかあ」

甘い声だった。

「じゃあ、聞き方を変えないといけないな」

逞しい腕に、ぐっと後ろから抱き込まれる。

「え……!？」

片方の腕で抱え込まれながら、もう片方の手が、するりとお腹を撫でた。ブラウスの上から、おへその下を、手のひらでゆつくり。

「あ……！」

すっかり慣らされ切った身体は、それだけでズキン♡と反応してしまふ。

でも、だめだ。ここは資料室で、外だ。廊下の向こうには人がいて、扉には鍵がかかっていない。

「ちょ、理人さ……」

「誰に触られてるか、ちゃんど意識しててね？」

そう言っつて、今度は手がスカートの裾から入って、ストッキング越しに太腿を撫で始めた。

膝の上から、内側へ。薄いナイロンの上を、指の腹がすり……♡すり……♡と上下する。布一枚ぶん隔ててるはずなのに、指の熱が伝わってくる。ゾワゾワした感覚が這いあがってくる。脚の

間が、じつとりとする感覚も。

「こ、こんなところで……」

かろうじて絞り出した、抗議の声。

「うん、だから、声、抑えててね？」

「そん、な……あッ♡」

する……♡する……♡

下着越しに、割れ目に沿って、理人さんの指が上下する。そのたびにジンジンとした感覚がお腹に伝わってきて、崩れそうになる。机の縁を両手で掴んだ。

それでも膝に力が入らなくて、思わず理人さんに背中を預けたら、腰のあたりに硬い感触があった。スーツの布越しでも、形がわかるくらいなの。

（理人さん、もう、こんな……）

いつも私のナカで暴れるそれを想像してしまつて、それでまた、きゆうん♡と反応してしまう。

指が、真ん中を避けて、周りだけをくるくるとなぞる。触れてもらえないところのほうが、熱い。腰が、指を追いかけるみたい
に小さく揺れた。

「腰、動いてるけど？」

耳のすぐ後ろで、笑った息がかかる。

（ちがう、動かしてなんか……）

指が、敏感な一点を探し当てて、コリコリ♡と捏ねまわし始めた。

「あ、ああ、あっ♡ あっ♡ そこは……♡」

「うん、もうこんなぶつくりさせちゃって。お外なのにな？」

「だって、それは、理人さんが……♡」

「そうだよ、ぼくに触られて、こんなになっちゃってるんだよね？」

こりっこりっこりっこりっ♡くにゅくにゅっ♡

下着とストッキング越しなのに、指の腹はちっともそこを外さない。

「あ、あ、あ、そうですっ♡ そうだから、もうやめてえ……♡」

「じゃあ、さっきのあいとはどうだったの？　こんなこと、した？」

「……え？」

理人さん、気づいてたんだ……。ううん、気づいてても、不思議じゃない。だって、あんなに鋭いんだもん。また……。顔に、出た？ 出たのかもしれない。微妙な、何かが。

「してないよね、真琴さん？」

低い声。クリがぐりゅうう♡と押しつぶされて、揺らされて、快感が一気に増す。

「あ、ああ——、~~~~ッ♡」

そのまま、休みなく、ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡と押しつぶされて、高みに持っていかれそうになる。体重ごと押し当てられて、腰が机のほうへ逃げる。逃げた分、後ろから理人さんの腰がついてきた。前は机、後ろは彼。お腹に回った腕ががちりと締まって、身動きすら取れない。されるがままだ。

「あ、やだあ、それやだあ♡」

耳が噛まれた。唇で挟むみたいに、こりつと。

「ひゃんっ♡」

「ねえ、真琴さんの恋人は誰？　ぼくだよね？」

（お、お試しじゃ……）

「まだお試しだと思ってるの？　じゃあ今日、決めさせてあげる」
言葉と一緒に、ストッキングが、下ろされた。

「あ……っ！」

腰のゴムに指がかかって、するる、と太腿の真ん中まで。そこで止まった。丸まったナイロンが両脚に引っかかって、歩いて逃げることができない。

そのまま、ショーツが脇にずらされた。濡れたところに、空気

が直接触れる。資料室の、紙と埃の匂いのする空気が。

ぬるうう♡

直接、下から上に撫で上げられて、さつき虐められていた場所に戻ってくる。

「ひ、うう……♡」

指が、ぬるん♡と滑る。それだけ濡れているのだと、音と感触で教えられる。

コンコン。

そのとき、ノックの音がした。

「真琴ちゃん、いる？ 事務の人に、ここだつて聞いて」

彼の声だった。ノブが回る気配。扉が、開きそうになる。

「あ、まって!!」

（こんな状態、見られたら……！）
入ってこられたら、全部終わる。

「どうかした？」

「こ、このままで……話したい。顔、見たら、うまく話せない、かも……」

扉の向こうで、少し間があった。

「そっか、相変わらず、だね」

ノブから手が離れる音がした。

「それで、さっきの話だけど……」

「あっ……♡」

そのとき、ぬりゆう……♡と指がクリを撫でた。

「……大丈夫？」

「あ、だ、だいじょぶ……!!」

（理人さん、やだ、こんなとき、指うごかさないで……!!）
頭の中で抗議しても、こんなときは、全然聞いてくれない。

体験版は、ここまでです。

このあと、止まれなくなるのは彼のほうです。

「まだわからない？じゃあいよいよ、だったら何もわからなくなるくらい溶かしてあげる」

「いよいよ。出た分、また入れるから。言ったよね、真っ白になるまで出すって」

「どこ行くの？まだ全然足りないのに？」

完全版は序章～七章と、彼視点の『彼の話』。約7.5万字（文庫サイズで約340ページ）。

体験版はその冒頭、約2.4万字と、予告編1本です。

▼ この続きは、完全版で

https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01713704.html

気になったら、お気に入り登録だけでもどうぞ。